

無垢な子どもとずるい大人 —サンプル—

八月。窓を開ければまるで山の中にいると錯覚しそうなほど激しく蝉の音が鳴り響いている。

(暑い……)

連日の猛暑。ニュース番組ではお決まりとなった「熱中症にご注意ください」。どうやら今日も体温を超える気温になるようだった。

とにかく暑い。それでも掃除や洗濯をするためには何度も窓を開け閉めする必要がある。篠崎は気にするなど言うけれど、どうしても電気代が気になって、家事が落ち着くまではエアコンをつける気にはなれない。

「ふう……」

掃除機をかけ終え、干してくれと呼ぶ洗濯機に向かう。パンパンとしわを伸ばしながらかごに入れたら次はベランダへ。

「ヤバ……」

思わず独り言を言ってしまうくらい気温が高い。時計を見ればまだ九時半なのに、真昼間と変わらない暑さだ。

(あ、そうだ！)

暑い日にはかき氷だ。かき氷機はないけれど、あとで買いに行けばいいだろう。どうせ夕食の支度の前には買い物に出なければならぬし、それなら今のうちに氷をたくさん作っておいて、昼食後すぐに買い物に出るかき氷機も一緒に買ってしまえばいい。

手早く洗濯物を干し、キッチンに入る。今の冷蔵庫は自動製氷なので、確か氷を作るトレイは棚の上の方に片付けてあったはずだ。

食器棚の上部に手を伸ばす。確かこの辺りのダンボールに入れたはず——しかし見当たらず、食器棚の天板の上に重なったダンボールを、引きずるようにして手元に寄せたときだった。

「あつ」

ダンボールが、頭めがけて降ってきた。

※ ※ ※

(……ん?)

遠くから子どもの泣くような声が聞こえる。夏休みで、家族で出かけようとしている家の子どもだろうか。しかしなんだか声が近い。テレビの音か——いくら言っても諒は午前中、

諒の頬にはいくつもの涙の痕が残っていた。いったいどれほどの時間、一人で泣いていたのだろう。申し訳ないことをした。きっと心細かったことだろう。

(一緒にいる……)

どれぐらいで大人の諒に戻るのかはわからない。それでも片時も離れず、ずっと一緒にいようと決めた。

三十分が経っても、諒は一向に目覚めなかった。それなら、と今のうちに必要なことをしてしまおうことにした。いわゆる便利屋というところに連絡をして、買い物依頼する。赤ん坊といえば哺乳瓶とオムツ……それから少し考えた末、ガーゼと柔らかいタオルと粉ミルク。ひとまずそれらを急いで届けてくれるよう手配して、電話を切ったあとは、往診してくれる医者を探しておく。しかし今回も医者にできることは何もないだろうことはわかっていた。もし頭にコブがあるようならすぐに検査を受けさせたが――。

(諒……)

幼い頃の精神的な傷。普段は元気なように見えて、諒は今でも引きずっていた。

それでも一緒に過ごすことによつて少しずつ癒せているものと思っていたが――。

(まだまだだったな……)

もしかしたら少しも変わっていなかったのかもしれない。二人でいるときは元気なふりをしていても、一人の時間には親や施設のことを思い出していたのかもしれない。

仕事をセーブする必要性もあるなどと考えていると、携帯が震えた。便利屋だった。諒を起こさないよう、コンシエルジュに預けたら電話をするように言い含めておいたのだ。

離れることに不安はあったが、受け取らなくては仕方ない。玄関まで届けてもらい、手早く受け取る。かかった時間は一分程度か。幸いその間に諒が起きることはなかった。

しかし諒の隣に戻ると、シーツが冷たくなっていることに気が付いた。そつとタオルケットを捲りシーツを見る。黄色いシミが広がっていた。

「諒くん」

小さな声で呼び掛けても反応はない。このままゆっくり寝かしてやりたいが、体が痒くなつてしまつてはかわいそうだ。そつと抱き上げ、浴室に運ぶ。マットの上に寝かせて服を脱がし、シャワーをかける。

「んなああ！」

「ああ、すまない」

さすがにシャワーをかけられては寝続けることはできなかった。泣き出してしまった諒を抱き上げて揺らし、泣きやむのを待つ。

「んやああ！ んやあああ！」

「ああ、驚いたな、悪かった」

やはり赤ん坊になつてしまつているようだ。視線も合わないし、混乱した様子もない。ただとにかく寝ているところを起こされて不快だという感情しか伝わつてこない。

「ほら、ゆらゆらだよ」

「んなああ！」

諒はなかなか泣きやまなかった。大人の諒は寝起きがいいが、赤ん坊の頃はよく泣く子どもだったのかもしれない。

(かわいいな……)

愛おしい。こんなに懸命に泣いて、不快だと伝えようと頑張っている。

「諒くん。シャワーは怖くないよ」

しかしあまりにも泣きやまないのも、もしかしたら起こされたことではなく、中途半端に濡れた体が寒いのではないかと思いついた。あぐらをかいて床に座り、足の上に横抱きにしてシャワーをかける。

「ほら、温かいな」

体にお湯をかけると、想像どおり諒の泣き声が止まった。

「寒かったな。気付かなくて悪かった」

顔にかからないよう気をつけながら体を温めるために肩や胸からお湯をかける。そうしながらさりげなくお尻や足の辺りを洗い流すと、諒は自然なしぐさで親指を咥えた。

「もう終わるよ。お腹が空いたか？ お風呂から出たらミルクを飲もうな」

やはり視線は交わらない。聞こえているかどうかともわからない。しかし諒にはちゃんと聞こえていると信じて声をかける。

「もう終わるよ。体がすつきりするな」

本当はペニスの皮を剥いて洗いたかった。しかし今はそこまでのことはできそうになく、シャワーを止めてタオルで包んだ。一番ふわふわのものを使うと、諒は少しだけ笑ったように見えた。

~~~~~

携帯を置いて諒の寝顔を眺めていると、突然諒が大きな声で泣き始めた。

「んにゃああああ！」

「ああ、起きてしまったか」

現実と夢の世界の区別がつかず怖いのだろうか。寝転んだまま抱きしめると、下腹部にあたるオムツに硬さを感じた。

「オムツか」

不快感で泣いたのだろう。頭を撫で、頬にキスをしてから色が変わったオムツを眺める。着替えさせるのが大変だからという理由でオムツ一枚の姿にしていたが、正解だった。本当に諒はオムツがよく似合う。

「たくさん出たな」

触れてみると温かい。それに全面的に硬くなっているの、尿もたくさん出たことだろう。

「きれいにしよう。オムツを開くよ」

つい、本当の赤ん坊には言わないようなことを言ってしまう。なんだかいけないことをし

ているような気持ちになるが、法には反していないことにほっとして。

ツンと鼻をつくアンモニア臭。しかし意識はそれよりも目の前に広がる絶景に吸い寄せられていた。

「たくさん出したな」

全面が黄色くなっているオムツ。その上にあるかわいらしいペニスと陰囊。魅力的なものがすべて一つの視界に入ってくる。早く替えてやらないと、と思うのに、もったいなくて替えられない。そこから目を離せない。

しばらく見ていると、突然顔にお湯がかかった。尿をかけられたのだとすぐにわかる。

「ああ、遅かったな。すまない」

勢いがあつたのは最初だけのようで、ペニスからはしよろしよろと尿が漏れ出ている。その様子がまたかわいくて。このまま見ていたいと思いつつ、あまりベッドを汚すと大人に戻った諒が怒るだろうと、亀頭を包むように手をあてて、尿がオムツの上に落ちるように調整する。最後まで出し切ると、諒はパタパタと足を動かし、お尻の辺りが濡れているので不快なのだろう。

「お風呂に行こうな。ピッカピカにしよう」

尿が垂れてしまわないよう、ざっと体を拭いてから抱き上げる。先ほどと同じようにシャワーで流し、体を洗う。

「気持ちいいな」

小さいからか、まだ諒が笑うことはない。それでも泣かないというだけで、不快に思っていないことはわかった。

風呂から出て、リビングに敷いたままの布団の上に下ろしても、諒は一度も泣かなかつた。ぐずりもしない。少し物足りなく感じながらも嫌な思いをしていないことにはよかつたと思つたし、小さい頃からいい子だったんだなと感慨深いような気持ちにもなつた。

寝室からテディを持ってきて諒の横に置き、急いでベッドを片付ける。

「諒くん」

リビングに戻ると、諒はテディで遊んでいた。触り心地がいいのだろう。ぺたぺたという触り方が幼くて愛しくてかわいくて……首を振って煩惱を振り払い、抱き上げる。

「ベッドができたよ」

テディごとベッドに寝かせ、タオルケットをかけて胸元をトントンしていると、諒はまたすぐに眠りについた。

（赤ん坊のときは上手に眠れたんだな……）

スムーズな入眠は少し物足りないが、諒自身のことを考えればこの方がいいのだろう。

諒の寝顔から視線を外し、携帯をいじる。ここまでイメージで世話をしていたが、実際の育児方法なんてきちんと調べなければわからない。かといって本当の赤ん坊の育て方に準じてしまつては、体が大人であることを考えると足りないことはわかつていて——もしかしたら同じように精神が退行してしまつた人がいるかもしれない、と閃いた。思いつく限りのキーワードを入力し、検索していく。

すると、大人用育児グッズ専門店という通販サイトにたどり着いた。開いてみると、そこはまさに篠崎が望んでいたサイトだった。

必需品と書かれたページには、かわいらしいピンクや水色の大人用オムツ。それからオムツカバーも売っているし、大人用のよだれかけも、いくつも種類が用意されていた。哺乳瓶だって赤ん坊のものより大きなもので、「乳首のサイズも大きいので大人でも飲みやすい」と書かれている。他にも大人用ベッドサイズの防水シートや、大きなサイズのマグもあった。

プレイ用と書かれたページを開いてみると、どうやらエイジプレイ愛好家向けのよう、貞操帯やミトンタイプの拘束具、おしゃぶり型の口枷まで売っていた。

（いいな……）

ミトンは似合うだろうと指が伸びかけたが、それを試すのは今ではない、と思いつく。諒が大人に戻ったらこのサイトを一緒に見て、二人で一緒に選べばいいとブックマークを残して離乳食のページを開いた。

それから三十分、諒が突然泣き出すまで目ぼしいものをカートに入れた。オムツを確認して、しかしまだ濡れてはいなくて、指しゃぶりを始めたことで腹が減ったのかもしれないと推測して。

（水分しか摂っていないからな……）

今日中に戻るなら心配はないが、このまま続くようなら――。

泣きじゃくる諒を抱き上げてリビングに入り、布団に下ろす。大急ぎでミルクを作ると、諒は一心不乱に乳首を吸った。

——その必死さが、切なかった。今は中身が赤ん坊なのだから当然とも言えるが、外見だけは大人の状態だ。小さい頃に満たされなかった空腹を、今必死に満たそうとしているように見えた。

「……たくさん飲もうな」

先ほどのサイトにはスペシャル便というものがあつた。追加料金を払えば首都圏なら最短当日で届けてもらえるらしいので、それを使えば一つくらいは食べられる離乳食があるかもしれない。もしミルクしか無理だったとしても、今の赤ん坊向け粉ミルクよりも栄養豊富なものを飲ませることができると、哺乳瓶だって大きなものを使えばもっとスムーズに飲ませられる。

「おいしいな」

話しかけても反応はない。諒は必死に口を動かしている。そんなに慌ててはむせてしまうのではと不安になるが、きちんと飲み込んでいるようだった。

諒は哺乳瓶三本分をしっかりと飲んだ。飲み終わったら眠くなったのか、うとうとし始めたのでベッドに運んでそっと下ろす——その瞬間、またギャンギャンと泣き始めてしまった。

「すまない。抱っこがよかったな」

あぐらをかいてその上に座るようにのせ、対面の状態でポンポンと背中を叩いていると、途中から一気に体重が重くなった。

（寝たか……）

本当に寝つきがいい。それは不安がないという証拠だろう。

(やはりこのまま……)

篠崎は在宅仕事だし、諒を一人で世話していくことはできる。収入も問題はないし、相性だつて変わらない。

もしかしたら諒は、このままの方が幸せなのかもしれない。今後二度と恋愛感情を抱いてもらうことができなかったとしても、諒のこれまでの精神的な負担を考えれば――。

~~~~~

「まんま！」

「ほら」

「んーっ」

赤ん坊になって三週間も経つと、諒は幼児言葉を離すようになった。離乳食もだいぶ食べられるようになったし、順調だった。

「んま！」

「よかった」

諒はかぼちゃやさつまいものペーストがお気に入りだった。大人の諒は好き嫌いなんでないのに、子どもの諒は好みがはっきりしていて面白い。

「ほら、諒、大根」

「……や」

どうやら大根は苦手らしい。柔らかく煮てあるし、もっと硬いにんじんだつて食べられたのに。

「嫌いか？」

訊いてみると、諒は視線を逸らした。しかし、顔だけは篠崎に向いている。

「あ……」

小さく開かれた唇。きつと嫌いと言わずとも態度でそうと表せば、大根が可哀想だと思つたのだろう。まだ小さいのに、諒らしい優しさを持っている。

「諒くん、俺は大根が好きなんだ。食べてもいいか？」

甘やかしすぎかもしれない。しかしもう体は大人だ。成長に必要な栄養というわけでもない。

「あげう」

「ありがとう」

素直な返事に思わず笑いそうになってしまった。札を言って、クマの描かれたスプーンで細切れの大根を口に含む。

「ん、おいしいな！」

大きさに言ってみると、諒がちらちらと大根を見た。食べるか？ と訊いてみると、小さく頷く。

「じゃあ一つあげよう」

もし食べられないようなら無理せず「いらない」と言えるようにしたつもりだった。そしてその作戦は成功だった。大根を一つ口に含んだ諒は二回咀嚼しただけで、口から出してしまったのだ。

「ああ、口に合わなかったか」

強引に食べさせてしまったかもしれない。口の端からこぼれる唾液をガーゼで拭い、お茶を飲ませる。

「ほら」

諒はもう、マグも使えるはずだった。アライグマは自分で抱くし、おもちゃも持つ。しかしなぜか食に関わるものを持つとはしなかった。スプーンも、マグも。ストローも嫌がるので、赤ん坊のときのように抱っこをして哺乳瓶で飲ませる。

「んく……」

(かわいいな……)

いつまでも赤ん坊でいい。このままのペースだとあつという間に大人に近づくだろうが——哺乳瓶を卒業させたくない。いつまでも抱っこがいいとねだっていてほしい。オムツだっていつまでも替えてやりたいし、体だって洗ってやりたい。

「んく……ん……」

諒は哺乳瓶を使うとき、目を閉じていることが多い。飲むのに集中するためなのかはわからないが、目を閉じていると本当の赤ん坊のように見える。

「んく……」

「……ちよつと飲みすぎだぞ」

大人用哺乳瓶は五百ミリリットル。すでに半分以上を飲んでしまった。しかし諒はまだ乳首を放そうとはしなかった。

「諒くん」

おしまい、と言いながら哺乳瓶を傾ける。乳首が口から外れるようにすると、諒は目を見開き、泣きそうな顔で篠崎のシャツの裾を掴んだ。

(……困ったな……)

これでは麦茶で満腹になってしまうだろう。粉ミルクでもないし、栄養が気になる。

「んく……」

しかし哺乳瓶を咥える幸せそうな顔を見ると、無理に取り上げることはできない。少し……いやかなり甘やかしすぎだという自覚はありながら、どうしても厳しくすることはできなかった。

「……おいしいな」

結局大根の口直しのつもりだった麦茶は一気にすべて飲まれてしまった。そのあとでお気に入りのかぼちゃペーストを差し出し出してみるが、口を開くことはなく。

「ごちそうさまか」

「ん！」

小さくても諒は賢かった。ほとんどの言葉を理解しているように見えたし、ごちそうさまと言う代わりに手を合わせることもできる。

しかし、気になることがいくつもあった。

たとえば、「まんま」という発声は、一歳前後で始まるらしい。つまりもう諒の精神年齢は一歳ほどまで成長しているはずなのだ。しかしまだ諒は一度も立とうとしていない。それどころか本来ならすでに走っていてもおかしくはないのに。それでもハイハイはするし、自分で座することもできるようになった。子どもの成長は個人差があるし——そういう思いと、実際にはもう大人なのだし、という思い。しかしもしこのままだったら諒の精神が大人になっても歩けないままなのではないかなんてことを思っただろう。

(大内クリニックに相談に行った方がいいか……)

しかし本物の赤ん坊ならまだしも、諒は大人だ。医師にだってわからないことの方が多いだろう。

「んな！」

「ん？」

「よう」

「うん。どうした」

普段篠崎が「諒」と呼んでいるせいで、諒は自分を諒と呼ぶ。舌足らずで発声もできていないが、自分のことを名前と呼ぶ姿が愛らしく、矯正はしていない。

「てりい」

「テディは——」

困った。テディは今ベランダだ。夜中の排尿量が多かったようで、今朝漏れて汚れてしまったのだ。洗濯機で洗い、今は乾くのを待っている最中。

「てりい！」

「……アライグマがいるよ」

しかし諒は「てりい！」と泣き叫んだ。次第に声が大きくなり、床に寝そべってバタバタと手足を動かし始める。

「てりい！」

「諒……」

もう一つテディベアを買うべきか。しかしこの様子では、他のテディベアでは納得しないことだろう。それにそこまでしてしまうとさすがに甘やかしすぎのような気がする。

「諒くん。テディは今お昼寝中だよ。諒くんもお昼寝してテディが起きるのを待ってみようか」

「てりいいいい！」

騒ぎすぎて、どうやら篠崎の声は届いていないようだった。抱き上げようにも手足をばたつかせているので近づけない。

(困ったな……)

こんな諒は見たことがない。濡れたテディを持ってくるか——しかし生乾きでは臭くなる

だろうし、内部にカビが生えてしまいかねない。そんなテディを抱っこしていれば、諒の健康が気にかかる。

「諒くん」

そつと呼び掛けてみる。しかし諒は泣き叫ぶまま。

(どうしたものか……)

育児書には、しばらく放置するのも手だと書かれていた。疲れれば落ち着くし、いちいち対応しては大人も疲れてしまうからと。理屈はわかるし、幸い防音もしっかりしていて他の家の迷惑になることもない。しかし見えていてつらくなる。

(諒……)

仕方なかったとはいえ、可哀想だ。こんなことなら明け方にオムツを替えておくべきだった。

「てりい！ てりい！」

手足にぶつからないようそつと近づき肩を叩く。ポンポンとすると、諒は泣き叫びながらも篠崎を見た。

話しかけては余計にイラつかせるかもしれない。無言のままベランダの方を指差す。すると諒は、声を上げるのをやめてそちらを向いた。

「テディはあそこだ」

「てりい！」

くるっと回転して、諒はハイハイでそちらに向かった。掃き出し窓の鍵はチャイルドロックをかけているので開けられないが――。

「諒くん、今テディはねんねだよ。起こしてしまつては可哀想だろう？」

「てりい！ ようとねんね！」

諒とねんね——確かにずつと一緒だった。お昼寝だつて常に並んで一つの布団に入っていた。外で一人で眠っているのは可哀想かもしれない。

「諒くん、諒くんは俺とねんねしてほしいな」

苦肉の策でそう言ってみると、諒はふつと篠崎を振り返った。

「ねんね？」

「そう。俺も諒くんと一緒に寝てほしいな」

諒の優しさを利用した発言。しかしこれ以上泣かせては喉を痛めてしまうから。

「ねんね……」

「諒くんの抱っこでねんねしたい」

「おえとねんね？」

「……きょうすけ、だよ」

大人の諒が呼んでいたように「篠崎」と教えるべきか迷った。しかしこれはチャンスなのでと打算的に考えた。

「しゅ？」

「きょうすけ」

「しゅけ」

~~~~~

「あ……」

「しゅけ？」

穏やかな日常が、終わった。

朝のミルク直後のオムツ替え。ほとんどハイハイもしない諒は今でもテープタイプのオムツを使っている……テープを剥がしてオムツを開いた途端、嗅ぎ慣れた匂いの中に、別の匂いが混じっていた。

(夢精……精通か……)

諒の様子を見ても普段と何も変わらない。きっとまだ、自分の変化に気が付いていないのだ。

「——たくさん出たな」

「んっ」

手早くオムツを丸め、袋に入れる。新しいオムツをお尻の下に敷いてからおしりふきですつと、ペニスを刺激しないよう優しく拭う。

(……大丈夫か？)

恐れていた精通。諒が性に芽生えたら、タガが外れてしまうのではと怖かった。

ペニスを刺激しないよう、諒に性の快感を教えてしまわないよう、気をつけながら陰部を拭う。

「んう……」

「どうした?!」

「ん……おねむ……」

「ああ……眠ってかまわないよ」

感じさせてしまったのかと焦った。テディを抱いてすやすやと寝息を立て始める諒を見ながら、ペニスの皮を剥いてみる。

(……変わないな)

当然精通を迎えたからといってペニスの外見が変わるわけではない。そもそも諒の体はすでに大人なのだから、特別な変化があるはずもない。

(……ここから……)

そつと亀頭を潰すようにして尿道口を開かせる。普段は尿を漏らすだけの場所。しかしここからいやらしい白濁を漏らすようになったのだと思うと、ついそのときの様子を想像してしまう。

(やばいな……)

ペニスが硬くなる。今まではまだ子どもなのだからと言い訳をしてこられたが——もし諒が勃起を覚えたら。ペニスが苦しいと、助けてくれと手を伸ばしてきたら……。

二人きりの生活だ。変な知識を与える奴はいない。手を出してしまってもきつと問題は無いのだろう。しかしそれではいけないような気がしていた。

オムツを閉じ、ゴミ捨てに立つ。ペニスは硬いままなのに、なぜか抜こうとは思わなかった。そのままベッドに戻り、諒の隣で携帯を開く。大人用育児グッズ専門店のプレイグッズのページで貞操帯を二種類とミルク専用棒を一本、カートに入れた。

「しゅけえ……」

「ん？ 起きたか」

諒がすりついできたので、押されるがまま仰向けになる。まだ寝ぼけているのか、諒は篠崎の体を敷布団にして眠りの世界に戻っていった。

(まったく……)

かわいすぎて困る。体は重いが愛おしい。頭を撫で、それから腰を撫でる。つい意識がペニスの部分に向いてしまうが、幸い今は勃起をしてはいないようだった。

(あと一時間ぐらいか……)

もうすぐ貞操帯とミルク棒が届く。

諒に何と言って使えばいいかは、まだ考えられていなかった。しかしこのままでは耐えられる気がしなかった。それだけでなく二日に一回諒が寝ている間に抜いているのだ。相手が子どもだと思ってもそれだけ欲が湧いたのに、もう射精できる年だと思つと――。

大人用の育児書には、子ども扱いをしていても体は大人であること、性欲はどうしてもなくならないこと、本物の赤ん坊であっても性的な勃起は起こりうるので無理に勃起を制御するのはなく、性欲のコントロールとしてミルク棒を勧めると書かれていた。

貞操帯が売っているのはあくまでペニスに触れてしまう子どもを守るため。そこが汚い場所だとわからずに快感を求めて触れてしまった手をしゃぶってしまう子がいるから――という理由付けだった。

今のところ諒が自分でペニスに触れたことはない。お尻が切れて痛いとか、その後でかゆみが生じたとか、そういうときもすべて篠崎に向かってお尻を突き出し「見て」とかわいくねだってきた。だからきつとペニスが勃起してムズムズしても諒は「おちんちん見て」と言うてくることだろう。しかしそうとわかっていても――いや、今回貞操帯とミルク棒を買ったのは篠崎のためだ。自分が諒に……何も知らない諒に手を出して嫌われてしまわないようにするために。

「ん……しゅけ……」

「ん？」

今度こそ起きたのだろうか。頭を撫でると、ゆつくりとそれが持ち上がっていく。

「しゅけ？」

「ん？ どうした」

寝ぼけ眼がかわいい。落ち着けるように頭を撫で続けると、もう一度頭が胸に降ってきた。

「まだおねむかな」

「ん……しゅけ、おふとん？」

「ん？ ねんねしながら諒くんが上につてきたんだよ」

「ん……」

どうやら寝ぼけているらしい。普段から滑舌が悪いのに、いつも以上に子どもらしい話し方になっている。

「もう少しねんねしようか」

「や……」

これも子どもみたい。眠いのなら眠ったらいいのに、なんとか眠気に抗おうとしてまた寝落ちてしまう。

「んう……」

すうすうというかわいい寝息が聞こえてくる。重みが増えて息苦しいが、どうしたって下ろそうとは思えない。

（大丈夫……まだ半年はある……）

諒の精神が実年齢に追いつくまであと半年。今悩んだって、治療法も解決法も浮かばないのだ。今できることはただ諒をたくさん愛することだけ。

諒はその後三十分、篠崎の体を布団に眠り続けた。それから寝ぼけた様子で隣にコロんと転がり落ちて、無意識のうちにテディを抱いて。それが、まるで篠崎よりテディがいいと示されているように思えて、腕を伸ばし、諒の腕からテディをスッと引き抜いた。その瞬間、諒は火がついたように泣き始めた。

「んぎゃああああああ！」

「ああ、悪かった……」

しかし心のどこかで「もう赤ん坊ではないだろう」という気持ちも芽生えていた。赤ん坊ではないのだから、そこまでテディを求めなくても、と。しかし諒の必死な泣き声を聞いているうちに、赤ん坊のままにさせたのは自分自身だということも思い出した。何をしてもかわいいと言って甘やかし、何もできない子に育てた。そのことに気付いてからも直そうとはせず、それどころかもっと自分に依存させようとした。

「てりいいいいい！」

「ああ……」

テディを渡すと、諒はテディをぎゅっと抱いた。涙も鼻水も、テディのふわふわの毛に吸い取られていく。

「ううう……てりい……」

「諒くん……」

それくらい自分にすがりついてくれたらいいのに——その思考をかき消すように頭を振り、諒を抱く。

「悪かった。少し嫉妬してしまったんだ」

「ちつと？」

「嫉妬。俺の諒くんなのに、諒くんがテディばかり抱っこするから」

素直に打ち明けると、諒はしばし考えて、それからテディをベッドに寝かせた。

「諒？」

「しゅけ、しゅき」

「あ……」

抱きしめられたというより抱きつかれた。それでもじゅうぶん諒の愛情も優しさも感じ取れた。

「でもとるの、め」

「ああ、そうだな」

順番を守るとか、人のものを取ってはいけないというのは、この三か月の間に絵本で学んだことだった。

「悪かった」

「うん、いーよ」

許すときは「いいよ」。それも絵本から学んだこと。諒は子どものときから優しい子だった。

「しゅけ、みゆく」

くくく

風呂を出て体を拭いて。ベッドでオムツをあてる前に、貞操帯を装着した。

「しゅけ、こえなあに？」

「これがちーするところを守ってくれるよ」

さすがに「子どもが触れないように」という名目で作られているだけあって、しっかりと造りになっていた。プラスチック製で、ペニス全体を覆うタイプ。排尿だけはできるよ。尿道口のところにはぽっかり穴は開いているが、これをつけている限り中身には一切触れることができない。それに赤ん坊用ということで、色もパステルピンクでとてもかわいい。

「よく似合ってる。かわいいよ」

「あいあと！」

諒はにこにこ貞操帯を見つめていた。何も知らないから喜べる——その純粹さにむくむくと劣情が湧き上がる。

「しゅけ」

呼ばれても視線を逸らしがたかった。いつまでも貞操帯をつけた諒の陰部を見ていたくて。しかし無視するわけにもいかず、諒の目に視線を合わせる。

「……ん？」

「ちーできる？」

「できるよ。ちーはできる。大丈夫だ」

「ん」

ご機嫌な諒。これから苦しくなるかもしれないというのに——十六歳にもなって何も知らないなんて、なんていやらしい子どもなのだろう。

「さあ、オムツをして……何をして遊ぼうか」

「絵本！」

「じゃあ、選んでおいで」

「らっこ」

「……ああ」

本棚は隣のリビングにある。しかし諒はかわいい顔で抱っこをねだった。抱え上げ、本棚の前に運んでやる。そうすると今度は篠崎が離れがなくなった。つい、何気ないふうを装ってオムツに触れなくなってしまう。貞操帯の存在をこの手に感じ取っていたくなる。

「しゅけ」

「……ん？」

「こえ！ こえよんで！」

「ああ、これか」

かわいいクマとアライグマの絵本。動物たちが森で仲良く暮らす本だ。諒のお気に入り。

「じゃあベッドで——ここで読もうか」

「しゅけ？」

「ほら、始めるぞ」

今ベッドに寝転んだら足を使ってでもオムツに触れてしまう気がした。

諒は不思議そうな顔をしたが、篠崎が読み始めれば絵を眺めるのに夢中になって、それ以上は何も言おうとはしなかった。

「……しゅけ」

「ん？」

「しゅけ、ちーいたい……」

その日の夜、諒はペニスの痛みを訴えた。

~~~~~

少し寒いな、と思いながら目が覚めた。でもまだ眠気が強くて、目を閉じたまま暖を探る。

「ん？ 起きたか？」

優しい声が聞こえてきた。大好きな声。ぎゅっと包まれ、目を開けると白い肌が見えた。

「ん……」

まだ眠い、そう訴えるために顔をスリスリと篠崎の胸にこすりつける。なんだかやけに眠い。そろそろ起きて朝食を作らなければならないのに。

「まだおねむだな。かわいい」

おねむなんて子どもみたいな言い方をされた。でもそれが心地いい。篠崎はいつも、とるけるように安西のことを甘やかす。

ずっとここにいたい。ずっとこの腕の中にいたい。しかしもう、起きなければ——。

身じろぎすると、お尻周りに違和感を覚えた。布団をどかしてみると、裸に——オムツ？

「……え？」

「諒くん？ ちーのところが痛いのかな」

「え？ え？」

ちーのところ？ 痛い？

篠崎はいったい何を言っているのだろう。

「ほら、大丈夫……もうちーのところは痛くならないよ」

篠崎を見ても、目が閉じている。眠いのだろう。昨夜もきつと仕事で遅かったのだ。

（篠崎が寝ぼけるなんて珍しいな……）

寝たばかりなのだろうか。しかしオムツとは……いったいどうして。

そういえば昨日……製氷皿を探して上からダンボールが降ってきたところまでは覚えてい
る。もしかしてそのとき頭を打って、失禁でもしてしまったのだろうか。

（やだ……）

恥ずかしい。それに迷惑をかけてしまった。もう大丈夫だと伝えたいけれど、篠崎はまだ
眠そうだし——。

「——諒くん？ どうした？ ほらおいで、ねんねだ。それともミルクかな」

「……ミルク？」

「……え？ 諒?!」

篠崎が驚いた様子で勢いよく体を起こした。両腕を掴まれ、少し痛い。

「諒?!」

「え、なに……篠崎、どうしたんですか」

「諒……諒か?!」

「え、え？」

変な夢でも見たのだろうか。まだ夢をひきずっていて混乱しているようにしか見えない。
「諒！」

「どうしたんですか？ 怖い夢でも見ましたか」

「……諒……諒だな、諒！」

痛いほど強く抱きしめられた。いったい何が起きたのか理解できない。

「……大丈夫ですよ。もう起きてますよ」

安西自身もたまに夢をひきずって、現実かどうかわからなくなることがある。そのときは
篠崎がいつも気付いて大丈夫と優しく声をかけてくれるから、それを真似して。

「篠崎、大丈夫」

「……ああ、諒……」

篠崎はすぐに落ち着いたようだった。体を離され、顔を見つめられる。

「……あの、」

「ん？」

「どうして僕、オムツを……？」

「ああ……」

視線を逸らされた。やはり何か恥ずかしい迷惑をかけたのだろう。

「すみません……僕、粗相をしてしまったんでしょうか」

「ああ、いや……何があつたか覚えているか」

「あ……製氷皿を取ろうとしたら上からダンボールが落ちてきて……そこまでのことは覚えてるんですが……」

「そうか……それで諒くんは赤ん坊になったんだ」

「……え？」

見てごらん、と向けられた携帯。ホーム画面にあったのは安西が思っていたのとは違う日付。

「え……五月？ しかも年も……」

「あの日から諒はずっと赤ん坊として過ごしていた」

「え、え……？」

「頭に怪我はなかった。しかし離乳食も食べられない赤ん坊で」

「うそ……」

信じられなかった。しかし篠崎がそんな悪趣味な嘘をつくとは思えなくて。

でも「まさか」という言葉が頭から消えず、キッチンに向かおうとベッドを降りたときだった。

「っ！」

「諒！」

足に力が入らなかった。どき、と体が床に落ちる。痛む足をさすると、なぜかとても細く驚く。それに、なぜかプレイマットが敷かれている。

「え……なにこれ……」

「大丈夫か」

「はい……でも足が……」

細い。しかし手や腕を見ても、記憶にあるものと変わらない。なぜか足の肉だけがごっそりと落ちてしまっているように見える。

篠崎が安西の足をさすった。

「諒くんは約一年、ずっと抱っこで過ごしていた」

「え……」

「まだトイレも覚えていないし、飲み物は哺乳瓶で摂っていた」

「え……やだ、嘘ですよ？ 冗談でしょう？ そんな夢を見ていたんでしょう？」

篠崎がまだ寝ぼけているのだと思いたかった。きっと携帯の画面だって加工して日付を変

えたのだらうと。目的は——わからないけれど。

「……おいで」

軽々と抱き上げられた。

「あ、や、待って、服っ！」

「ああ……すまない。着替えさせるのが大変だったから着せていなかったんだ。オムツも替えるし、我慢してくれ」

「えっ……」

戸惑った。けれど篠崎に大変だったと言われてしまうとわがままは言えない。

「諒くん」

「あ……」

戸惑いは消えない。けれど今は状況を理解するために、篠崎の首に腕を回した。

「いい子だ」

「え」

「いや、すまない」

褒めるのが癖になっていた、ということだろうか。まだ頭が混乱していて、黙ったまま移動が終わるのを待つ。

（あ……え？）

リビングも、安西が知っているものとはまるで変わってしまった。部屋の端に見えるオムツのパッケージ、それから絵本棚。ぬいぐるみや積み木、車のおもちゃ、それから離乳食セットと書かれた段ボール。床に敷き詰められたプレイマットは寝室のものと同じ薄いベージュ。たった一晩でこんなに変わることができないはずがない。

「これ……」

「信じてくれたか」

「篠崎……」

「……腹が空いただろう。諒くんはあまりたくさん量を食べなかったから、すぐに腹を空かせていた」

「あ……」

~~~~~

「もう少しだけ、世話をさせてくれないか」

「でも大変でしょう」

「まさか。これからもずっと世話をしていきたい」

「っ……」

言い方が本気だった。もう長く一緒にいるのだ、本気か冗談かくらいわかる。

「本当にかわいかったんだ——ああ、もちろん今の諒くんも赤ん坊になる前の諒くんもかわいくて愛してるよ。だが愛している諒が赤ん坊になるとこんなにかわいいのかと……」

篠崎が自分の手のひらを見つめた。体のサイズごと赤ん坊になっていたわけでもないのに、まるで手のひらの中に赤ん坊の安西を見ているかのよう。

「……かわいいがってくれたのはもう伝わってます」

他に言いようが浮かばなかった。だって今胸にあるのは戸惑いだけだった。意識のない間、自分がいったいどのようなに篠崎に愛されたのか知りたいような、でも知ったら戻れなくなってしまうような、そんな狭間にいることへの戸惑い。

「諒……」

「あ……」

篠崎の顔が近づいてきた。キスだ——目を閉じると、触れるだけの優しいキス。なんだからとつても久しぶりなように感じる。

「諒……愛してる。大事にする。これからはちゃんとトイレも教える」

「……え？」

これからは、と言った。その意味がよくわからない。

「いや、何でもないよ。大丈夫、排泄の感覚だつてすぐに思い出せる」

「……はい」

「それまで俺に世話をさせてほしい」

「……ん……」

頷くと、痛い程に強く抱きしめられた。しかし体はすぐに開放され、寂しいと思ってる間に宙に浮く。

「わ、」

「落としたりしないよ。さあ、オムツをきれいきれいしような」

「あ……」

普段よりぐっと穏やかな優しい話し方。きっと赤ん坊の安西にも、今のように話しかけてくれていたのだろう。たくさんたくさん、愛情を注がれていた。

(……ふわふわする……)

まるで温かくふわふわな綿の上に寝かせられているみたい。それくらい心がふわふわして、幸せで満たされている。

「デディを抱っこしていいようか」

「あ……」

ベッドに下ろされてすぐ、隣に置かれたデディ。なんだか記憶にあるデディよりみずばらしい。

(ボロボロになるくらい遊んでくれたのかな……)

ごめんね、と心の中で謝りながらデディの体を優しく撫でる。

しかしオムツのテープを剥がされる感覚に、ハツとなった。

「あ……」

「大丈夫、この中はとてもかわいいよ」

「やだ……、ごめんなさい、やっぱり無理ですっ!」

体を丸め、うづくまる。だってやっぱりオムツ替えなんてしてもらえない。されたくないわけじゃない。どうしても嫌だなんてことは思っていない。でも、やっぱりオムツ替えをしているときに篠崎が突然ふっと我に返ってしまうんじゃないかと怖くなった。

「諒くん」

怖かった。さつきはよろしくお願ひしますと言ったのに、もう翻意するなんて、と思われるかもしれない。

しかし篠崎は安西を優しい声で呼び、それから器用に体を抱き上げた。

「あわっ」

「かわいい。今はまだオムツ替えの気分じゃなかったかな」

「あ……」

篠崎は怒っていなかった。それどころか、少し嬉しそうにも見える。

「もう少しあとでしようか」

「しのぎ……」

大丈夫、と言うように額にキスをされた。その優しさに、胸がきゅつとなる。

「落ちてくまでこうしてような」

「……ん……」

ぎゅつと抱きつくと、それだけで気持ちが悪くなると落ち着いた。篠崎はきつと安西を嫌わない——でもちゃんと、言葉でそれを確かめておきたかった。

「……篠崎」

「ん？」

やっぱり優しい声。見上げると、安西を見つめる目も優しい。

「……嫌わない？」

~~~~~

「今は勝手にちーが出てしまうだろう？ そうなる前に、お腹に力を入れて自分でちーを出してごらん」

「あ……」

そうか、そういう方法があったか。漏れる前に出してしまえば、勝手に漏れ出すことはなくなる。

「この辺……ここにぎゅつと力を入れてごらん」

篠崎の手が下腹部を撫でた。そこに意識を集中させて「んっ！」といきむ。

「上手だ」

篠崎が体をずらした。安西の足を開き、間に腰を下ろしてオムツをじつと見つめている。

「あ……や、やあ……」

そんなところ、見ないでほしい。しかも今、自分の意思でそこを濡らそうとしているのだ。

「まだ出ないな」

篠崎の手がオムツを覆った。前立ての方ではなく、会陰や陰囊の方から包むようにして優しく……。

「あつ……」

ドキドキしたら、反応してしまった。咄嗟に顔を背けてしまい、訝しがられる。

「どうした？」

「いえ……」

触っているのだからわかるだろうと思ったけれど、考えてみたらそこには貞操帯がはまっている。触れているだけではわからないし、だからこそ安西はそこに痛みを感じているのだ。

「なんでもなく……はないな？」

「や……」

言えない。言いたくない。だって恥ずかしい。それに——篠崎にわかってほしいと思った。気付いてほしい。安西の体の変化に。

黙っていると、篠崎がフツと息を抜くように笑った。

「痛いかな」

「あ……」

わかってくれた。でも、その痛みを取り除いてくれようとはしない。

「……うん」

「どこが痛い？ お腹かな」

「やつ……」

意地悪。わかっているくせに。それとも、ぐずるきっかけを与えようとしているのだろうか。

「諒くん、痛いのないしよっか」

「やあ！」

ないないしてよ、と思った。安西に訊くのではなく、篠崎が自分で調べてどこが痛いのか、どうして痛いのかを考えて、それで解決してほしい。

「ああ……」

かわいい、と言いたそうな顔で抱き上げられた。抱っこは好き。でも今はそれじゃない。

「やああ！」

「お腹が痛いな」

「やああああ！」

違う。どうしてわかってくれないのだろう——ちゃんと言わなきゃいけないのだろうか。でも恥ずかしい。おちんちんが痛いですが、なんて子どもはどうやって伝えるのだろう。

「お腹が痛いのかな」

篠崎の目がさらに細められた。篠崎も楽しんでいることがわかる。

（あ……これがエイジプレイ……？）

甘えたい人と甘えられたい人。ぐずりたい人とぐずられたい人。世話をされたい人と世話をしたい人。はまる理由がはっきりとわかったような気がした。

「……ちー」

「ん？」

「ちーするところ、いたい……」

「っ！」

必死に搾り出した言葉。しかし篠崎はバツと安西から視線を逸らした。

「あ……あの、えっと、その……」

さすがに子どもじみていたかもしれない。少なくとも篠崎の求めていた言葉ではなかったようだ。

「諒くん……」

「あの、ごめ——」

「ああ……やっぱり諒くんだ」

「え？」

「……いや、何でもないよ。そんなにかわいいことを言ってくれるとは思ってなくて。ちーするところが痛いんだな」

「あっ」

ベッドに寝かされ、ペリっとオムツのテープを剥がされた。中を見られ、恥ずかしい。

「ちーするところが膨らんでしまったか。すぐにおしぼりを取ってくるよ」

「え？ あっ」

どうしておしぼり？ と訊く前に、篠崎はサッとベッドを下りてしまった。次いで一瞬立ち止まり、ちらりと安西を見てから足早に寝室を出る。

(……もしかして、連れて行こうか悩んだ……?)

きつと言葉どおり、篠崎はずっと一緒にいてくれたのだろう。ベッドに残しておくと落ちるかもしれない、なんて考えて。

(……ふふ)

ペニスに苦しいけれど、気持ちは穏やかだった。だって本当に愛されていた。なんてことを思ったら恥ずかしくて、テディを抱いて顔を埋める。

「お待たせ」

「あ……」

篠崎は、濡れおしぼりを持って戻ってきた。いったい何をするのだろう——貞操帯があつて汚いから、拭いてから愛撫をしてくれるのだろうか、と期待する。

「ちーするところ、つらかったな」

「ん……」

篠崎が剥きだしの陰部に近づいた。正面に座ったので、羞恥をごまかすためにテディを抱いて顔を埋める。

(はあ……ん……ドキドキする……)

つい数日前にもしてもらった感覚なのに、なぜか体は久しぶりだと感じている。不思議な感じ。

「う………!!」

(……え?)

「よし、これでいい。もう治ったよ」

信じられなかった。何か冷たいものが——けれど、貞操帯も外されていない。それなのに、なぜか陰部が一瞬で冷たくなって、そして、強制的に萎えさせられたことに気が付いた。

「あ………あ………」

(なんで……?)

どうして——赤ん坊だから?

「諒くん、ちーするところ、もう痛くないよ」

「や………」

「ん?」

テディを抱いたままだからか、声がうまく出せない。

「や………やあああああああ!」

なんで。今までそんなこと、されたことなかったのに。無理矢理冷たいおしぼりで勃起を萎えさせられてしまうなんて……。だって、今までの篠崎だったら、勃起できたことを褒めてくれていたのに。

「驚いたな、悪かった。ほら、もう終わったから大丈夫だよ」

オムツを戻され、抱き上げられて揺らされる。普段なら嬉しいのに、今は「こうすれば機嫌が直る」と思われているみたいで不愉快だった。

「や! やあああ!」

「諒くん、もうちーするところは痛いがないしたよ」

「うろう………」

ひどい。こんなの篠崎じゃない。そう思うのに、勃起を「治された」のだと思うと、いやらしくて。

「痛い我慢して偉かったな」

「うろう………」

いじってほしかった。今までのように勃起ができたことをたくさん褒めながら優しく撫でて、硬度を増した先端から垂れたお汗を敏感な亀頭に塗り込めるように皮越しにクチュクチュして、そうやってどんどんどんどん体を高めて、でも時折手を止めてすと匂いを嗅いで、やめると言う安西の言葉も無視していやらしい顔で「もっとよく見せてくれ」と笑って皮を剥いて、至近距離から恥ずかしいところをじっと見つめて、篠崎が満足する前に限界を迎えた安西の「もう触って」というおねだりにふっと笑って、その吐息を敏感に感じ取ってしまった濡れた亀頭をまたじっと見つめて……たったそれだけで震えてしまう勃起をもう一度笑って、今度こそパクリと大きな口でペニスを根元まで啜えて——

「はあっ………」

思い出したらいやらしすぎて、またペニスが膨らんでしまった。しかし貞操帯に阻まれて大きくなれず、苦しくて、痛くて。

「いやらしい顔になってる」

思わず顔を背けると、篠崎がまたくすりと笑った。

「ちーするところ、もう一度治そうな」

「やっ」

もう治さないでほしい。苦しくてもいいから……萎えさせられるくらいなら、このままの方がいい。

でも今の安西は赤ん坊だから、その気持ちを伝えることができなくて……ベッドに下ろされ、なすがままになるだけ。オムツが開かれ、恥ずかしいところを見つめられ、貞操帯越しに冷たいタオルでペニスを包まれ、その冷気で萎えさせられる。

「あつ……」

「よし、治ったよ」

なんていやらしいことをされているのだろう。恋人同士なのに恥ずかしいところを見つめられるだけで、いじつてもらえない。それどころか無理矢理小さくされてしまうなんて。

射精はしたいけれど、させないでほしい。このまま何度でも勃起して、その度に小さくさせられて、いやらしい気持ちを高められ続けて……そしてずつと我慢させられて、いつかの体がちゃんと大人に戻ったら、そのときに「大人になったな」と言ってくれませんか。射精させてほしい。

でも、いったいいつになるのだろう。そう思ったらまたペニスが膨らんでしまった。こんな状態では篠崎ももう面倒になってしまいかもしれない……そう思ったら痛いとは言えなくて。

「諒くん、気分が落ち着くまで絵本でも読もうか。それとも抱っこでこのままねねしてしまおうか」

篠崎は穏やかな声で言うけれど、どちらか嫌だった。だってこんなにも、もう一度オムツを開いていやらしいところを見てほしいと思っっているのに、篠崎はどうして気付いてくれないのだろう。ペニスはもう貞操帯の形になってしまいそうなくらいなのに。

「やああ……」

「ん？」

「やああ！」

「どうした？」

「やああ！」

何度も声を上げると、篠崎はハッとした様子で、それでも丁寧に安西の体をベッドに下ろした。それから手早くオムツを開いて瞠目する。

「……またちーするところが痛くなってしまったのか。気付くのが遅くて悪かった」

ダメ……また小さくされてしまう——してほしい。でももう苦しい——。

「……諒くん、ハイハイしてみようか」

(え……?)

「ハイハイ、できるかな」

それならできる気がした。させられる理由はわからなかったけれど、くるりとひっくり返って四つん這いになる。そして手と足を動かそうとしたとき、突然足首を掴まれた。

「移動はしなくていい」

「え？」

「そのままそうしていてくれ」

「あ……」

まるでお尻を突き出しているみたい。恥ずかしい。でも今度こそペニスを楽にしてもらえるのかもしれないと期待する。

オムツが外された。尿が出ていないせいか、軽い音がする。お尻を見られていると思うとドキドキしてペニスさらに硬くなって——あれ？　そういえば貞操帯を外されていない。背後からでも外せるものだろうか。

不思議だったけれど、篠崎に任せれば大丈夫だと思えた。このあとの行為への期待に胸を膨らませながら、そのときを待つ。

「かわいいお尻だ。ここをほぐしてやると諒くんはとても喜んだ」

篠崎の指がアナルに触れた。ドキドキする。久しぶりだけど……だからこそ、最初から挿入されるのだろうか。もしかしたら本当は、篠崎もそれくらい安西を求めてくれていたのかもしれない。

「大丈夫、痛くないよ。赤ん坊の諒くんは甘えん坊で、うんちを掻き出してもらうのが大好きだった。わざとうんちを我慢してお尻をほぐしてもらおうとしていることもあった」

そんなことを言われたらまるで淫乱みたい。大人の安西がそうねだるならまだしも、何も知らない赤ん坊がそれだったら天性のものだ。でも篠崎に言われると、嫌じゃない。それに篠崎は「かわいいだろうか？」と自慢げに言った。

「んう……」

「ん？　寒いか？」

「んん……」

違う。身震いしたのは寒さからではなく、興奮からだ。でも言葉を使わずにそれを伝えるのは難しい。黙ったまま、やり過ごす。

篠崎がヘッドボードから何かを取り出した。でももう羞恥心が高まりすぎて見ていられなかった。テディを抱いて、お腹に顔を埋める。

(コンドームかな……)

いきなり入るだろうか。でも痛くてもいい。早く篠崎がほしい。

「うんちをするときのようになんてしてごらん」

「んっ……」

言われたとおりに力を入れる。すると、硬いものがズルツと中に入ってきた。

「ひゃあっ！　なっ、」

「これを見ると三日は楽でいられるから」

いったい何を入れられたのだろう。ローターとも違う。もちろん篠崎の指やペニスでもな

い。篠崎の指と同じぐらいの太さのものが奥に進んできているのがわかる。

「ここだ。すぐに終わるよ。大丈夫」

奥の、お腹側の腸壁をぐっと押された。

「っ、あ、何っ」

痛くはないが、圧迫感がひどい。少なくとも、性感を与えようとされているのではないことはわかった。

困惑していると、何かがペニスから出ているような感覚があった。下から覗き込むように見ると、ペニスの下に敷かれたオムツにとろりとしたものが垂れている。

「簡単に言えば精液だよ。こうやって抜いてあげればちーするところが痛まなくなるから」

「そんな……」

てつきり気持ちよくしてもらえるものだと思っていた——すごくいやらしいことをされているのに、まさか精液が抜かれていたなんて。

(え、じゃあ精液が抜かれてるってことは射精ができないってこと……?)

何が何だかよくわからない。客観的に見ればひどいことをされているのだろう。けれど精液が出るにつれて体の熱が冷めていくのは感じるのに、頭の中は興奮を保っている。いや、興奮が高まっている。

「よし、全部出せたかな」

達成感のある声。この温度差が苦しい。

「や……」

「慣れないとつらいかもしれないが、慣れたらすぐに楽になる。おちんちんのところ……ちーするところが痛いのは嫌だろう？」

~~~~~

体幹は大事——まさかこの年になってそんなことを意識するとは夢にも思っていなかった。意識が戻ってから十日。寝てばかりいた生活が長すぎたせいか、体力が許す限り座って過ごしていても、なかなか座りが安定しない。

「あっ」

「おっと……」

まるで眠りかけの子どもみたい。胸にテディを抱いていれば体は少し安定するけれど、体育座りやあぐらでは体がすぐに疲れてふらついてしまう。

「焦る必要はないんだ。そろそろ休憩をしよう」

「ダメです」

早く前の体に戻したい。プレイとしてはもうこの生活にはまっぴらだと認めざるを得ないけれど、「プレイ」は体が戻ってからでもできることだ。とにかく今は少しでも篠崎の負担を減らしたかった。

「諒くん。俺は諒くんが抱っこしてと甘えてくれるのが好きなんだよ」

「でもそれは僕が歩けるようになってからでもお願いできることです」

「そうかもしれないが……だがそうになったら、自分でオマルに行けてしまうだろう？」

「え？」

「いや、俺はただ諒くんをオマルに運んで排泄しているところを見ていただけなんだ」

「えっち……」

オマルへの排泄を見ただけ、なんてとんだ変態発言だ。しかし篠崎がこうして思いを言葉にしてくれるおかげで、オマルやオムツへ排泄する嫌悪感がなくなったのだ。

「恋人のかわいい姿を見るのは誰だって好きに決まってるだろう？」

「……かわいいと思うところが変わってるんです」

「そうか？ 俺は諒くんが何をしていてもかわいいと思うよ。よだれを垂らして寝ていても……もちろん赤ん坊のときはガーゼで拭いてやっていたが、今は舐め取ってやれるから嬉しいな」

何も言い返せない。負けた——いや、でもまだ負けは認めたくない。

「寝ているときにおならをしても？」

我ながら、ひどい例えだと思う。こんなことしか浮かばなくて恥ずかしい。しかし篠崎は嬉しそうに表情を緩めた。

「そのときは、うんちと一緒に出ていないか寝ている間にオムツを開いて確認するよ。赤ん坊のときにそれで何度かおしっこをかけられたことはあるが、小さなおちんちんから尿が溢れるところを見るのは最高だった」

自慢げに言われ、言葉を失った。しかも篠崎の言葉を信じるなら安西はすでにそれをやらかしていて、しかも世話をしてくれようとした篠崎に尿までかけたという——。

(最低だ……)

いくらなんでもひどすぎる。信じられないし、信じたくない。けれど篠崎はそのときのことを思い出しているようで、遠くを見るような目でほほ笑んでいる。

「……すみません、本当に……」

「ん？ 謝ることなんてないだろう？ オムツの中がかわいくて、俺がのんびりしていたんだよ」

——と、言う顔は、本当に幸せそうだ。安西に気負わせまいと言ってくれているのか、それとも本当に篠崎の趣味なのか判断がつかない。

「さあ諒くん、休憩だ。ミルクを飲んでオマルでちーする練習をしよう」

大好きなミルク。そう言われると、意識はころっと切り替わってしまう。

「ん」

篠崎を振り返り、首に腕を回す。ふわ、と浮いて、下ろされるのはリビングのプレイマットの上。

「すぐに用意するよ」

篠崎がキッチンに入る。少し離れているけれど、ここからでもその姿はちゃんと確認でき

るし、篠崎もちらちらと安西を見ているのがわかる。

(……むずむずする……)

今までも、愛情たっぷりに接してもらっていたと思う。けれどここまであからさまで極端だったことはたぶん、一度もない。

幸せだなあと思う。本当は赤ん坊になっていたころの記憶があれば一番よかったけれど——いや、やっぱりそれは忘れている方が幸せだろう。きつとさつき聞いた以上のことをやらかしてしまっている。

「諒くん、お待たせ」

戻ってきた篠崎に抱っこをされて、ミルクを飲む。味もおいしいし、篠崎の目も優しいし、満たされる。

「そうだ、そろそろ一度貞操帯を外そうか」

安西が哺乳瓶を咥えているからか、篠崎は返事を求めず先を続けた。「洗うときに膨らんでしまわないように、先にお尻から白いのを搾っておこう」

どうやら篠崎はまだ射精させてくれる気はないらしい。いや、もしかしたら安西からねだるのを待っているのかもしれないけれど。

「……お搾り、やだ……」

手は使わず、顔を背けることで口から乳首を抜いた。

「お搾りが嫌？ どうして」

そんなの、言わなくてもわかるだろう。無理矢理精液を搾り取られて喜ぶ人なんているわけがない。

「ぴゅ……」

「ん？」

「ぴゅっぴゅ……したい……」

恥を忍んで言ったのに、篠崎はスツと目を細めた。

「それは大人がする射精のことかな」

「あ……」

大人がすること、と言われてしまった。まだ一人で座っていることも、尿意を感じとることもできず……ミルクが大好きで、ご飯はもっぱら芋類のペーストな安西にはまだ早いということだ。

「……確かに子どもは大人の真似事をしたがるものだが、子どもだからこそ楽しいことをしてしまおうと頭の中がそればかりになってしまおう……わかるかな？」

わかりたくない。でも、わかってしまおう。

「諒くんは俺のかわいい赤ん坊だから、まだ大人の真似事はしてほしくないな」

(篠崎……)

これほど長い間迷惑をかけているのだ。それが篠崎の希望だと言うなら我慢はしなければならぬだろう。

「このピンク色の貞操帯は、性感を知ってしまった赤ん坊が勝手に触ってしまったように

するために作られたものだよ」

返事は求めていないようなので、口を動かしミルクを飲む。

「ここはぼちいところだろう？ だから勝手に触ってしまわないようにしているんだ」

ぼちいとところ……篠崎に会うまではそう思っていた。けれど篠崎と結ばれてからは、排泄器官というより性的な印象の方が強くなっていったような気がする。

「諒くんはちーもうんちも気持ちよくてすぐに膨らませてしまうから、大人になるまで頑張っつて我慢しような」

どういうタイミングでペニスを膨らませてしまうのかもすべて知っている篠崎に対して、反論は一つも思い浮かばなかった。かといってそれを受け入れるのも難しく、聞こえていないふりをしてミルクを飲む。

「諒くんにはまだ難しい話だったな。大丈夫、そのときがきたらちゃんと俺が教えてやる」

ドキッとした。だってそれはつまり、人生で二度目の篠崎からの性教育を受けられるということだ。それに、きっと今回は前回以上に事細かに教えてもらえる。何から何まで——そう思ったらなんだか嬉しくて。

(っ……痛い……)

またペニスが膨らんでしまった。しかし貞操帯が邪魔をするので篠崎はそれに気付かない。

「うう……」

ミルクを飲みながら唸ると、篠崎が笑いながらオムツに触れた。

「膨らんでしまったんだろう？ 諒くんはすぐにここを膨らませてしまうな」

~~~~~

安西が寝ている間、篠崎はトレーニングパンツからオムツに換える。最初はトレーニングパンツのまま眠っていたけれど、パンツ内の不快感で目が覚めてしまったとくさん泣いたからだ。おねしょをしなければいいのだけれど、どうしても寝ている間に出してしまうことが多いから……それで篠崎は安西が寝たあとでそつとオムツに換えてくれるようになったのだ。

「ん？ ああ、ちーも出てたな」

おしりふきできつと陰部を拭かれる。それから体を横向きに動かされ、ペニスの下にオムツを敷かれる。

「うんちのところをちよつといじるよ」

サックをつけた指がアナルに入ってくる。排便は、朝のうちにオマルでした。もしかしたらまだ便が残っているかもしれないけれど、赤ん坊になってからは一度も腸内洗浄はされていない。

「柔らかい」

当然だ。だって排便はだいたい篠崎にアナルをほぐしてもらうことでしているのだ。そうやって柔らかくしてもらってからいきみ、怪我がないようにしてもらおう。

二本に増えた指が、丁寧に内部を広げた。ボディを抱いて刺激を待っていると指が抜かれ、

それから大きなものが添えられる。

「うんちのんーってしてごらん」

言われたとおり排便するように力を込める。すると大きなものがぐっと中に入ってきた。

「狭いな……」

思わず漏れてしまったというような感想。でも狭ければ狭いほど、篠崎には楽しんでもらうことができる。

「諒くんが大好きなところトントンしような」

前立腺を亀頭でトントンとノックをされる。それだけで気持ちよくて、体にぐっと力が入

って——。

「あう、んうん……」

「うん、うんちのところ気持ちいいな」

「んっ！ うんち気持ちいいっ」

本当はペニスをこすってほしかったけれど、篠崎の言うとおりでペニスで快感を得られると知ってしまったら、きつと自分で勝手にオムツを外していじろうと思うってしまったから。だからずっと、貞操帯はつけたまま。

篠崎の手が貞操帯に触れた。指の腹でそつと尿道口を撫でられる。

「上手に気持ちよくなれてる」

そう言っって篠崎の指が離れる。

「んっ……うんちのところ気持ちいいっ」

最初こそペニスが苦しくて苦しくて何度も泣いた。勃起を手で確認するくらいなら貞操帯を外してくれたらいいのにと何度も思った。でも今は自分が赤ん坊だという意識が強くて、大人のようにペニスをこすりたいとは思わない。それよりも篠崎が優しく前立腺をトントンしてくれる方が嬉しい。相手は赤ん坊だからと言って激しくしないところも、いつお漏らしをしてもいいようにとコンドームをつけるのではなくペニスの下にオムツを敷いてくれるところも好き。

安西が赤ん坊になってからの篠崎のセックスは以前とは違う。安西がただの大人だったときは舌を絡めるキスから始まって乳首が真っ赤になるまでこねられ、ペニスからは射精したのかと思うほどにカウパーが垂れて、そこでようやくそれを口に含んでもらえて……そうしながら伸ばした手では敏感な乳首を、もう片方の手ではアナルを、と三か所を一気に刺激されて、あっけなく射精して……あまりの快感で体がぐずぐずになっている間に篠崎の熱を埋め込まれて、連続で与えられる刺激にペニスは萎える暇もなくて。篠崎は腰を振りながら勃起をやめない安西のペニスを激しくしごき、先端から撒き散らかされた潮を浴びながら安西の中に射精する——。

でも今はまったく違う。正常位はせずに、背面側位。大好きな腕の中に閉じ込められたままペニスにも乳首にも触られることなく、ゆっくりとした動きで前立腺をトントンしてもらうだけ。だから絶頂にはとても長い時間がかかる。でもその分、気持ちいい時間もずっと長い。

篠崎だって本当は激しく腰を振って気持ちよく射精したいだろうに、「諒くんはまだ子どもだから」と言って手加減をしてくれている。そう考えるだけで興奮が高まって――。

「あつ、ぴゅっぴゅするっ……!!」
もう貞操帯をつけたままでも射精できるようになってしまった。でもまったく嫌じゃなくて。

「ぴゅっぴゅ、か。いやらしいな。だがそれは本当にぴゅっぴゅかな？　ちーじゃないか？」
「あ……」

たぶん、精液だと思う。でも訊かれると不安になる。だってその二つはとてもよく似ているから。特にペニスをしごかれぬ射精のときは、どちらかよくわからなくなる。

「諒くん」

わかってる。この質問は意地悪じゃない。似ているそれは、赤ん坊では間違いかねないという篠崎なりの配慮なのだ。

「うう……ぴゅっぴゅ……」

自信なく答えると篠崎が笑った。

「出してごらん」

敷いてあったオムツを尿道口に押し付けられた。これなら何が出てしまったとしても……何が出てきたとしてもベッドを汚さなくて済む。

(あ、だめ、でるっ、でるっ！)

だんだん、どちらが出るのかよくわからなくなってきた。でももうどっちでもいい。とにかく早く出したい。けれど篠崎の動きはずっと穏やかなまま。激しくしてくれたらすぐに出せるのに。

はあはあと息が荒くなっていく。もう出る、もう出る！　という絶頂直前の強い快感が長く長く続いている。

「はあっ……」

穏やかな刺激なのにすごく気持ちいい。ペニスをこすられるだけよりも、その何十倍も何百倍も気持ちのいいセックス。

トントントン。

優しい前立腺へのノック。

トントントン。

的確に場所を捉えるそれは決して前立腺を外さない。

トントントン。

まるで精液に「出ておいで」と呼び掛けられているみたい。なんてことを思った瞬間、ぴゅるっつと精液が漏れた。激しい射精ではないので大きな嬌声を上げることなく、ちゃんと子どもらしい射精をすることができた。

「白いのだな。ちーじゃなかったよ」

オムツの重さで感じ取った篠崎が、そっと手を動かして先端の汚れを拭う。

無垢な子どもとずるい大人 —サンプル—

gooneone (一)一わんわん)

2021/ 8/ 26

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: @gooneone

